

水道ジャーナリスト 有村源介の

源流 本流 汽水城

NO. 24 水道水を飲む



シンガポールのチャンギ空港に
ある飲用設備



上海ホテルで「飲用不可」の
張り紙が



上海万博の会場で直飲水を
飲む人々

もう 20 年かそれ以上前になるだろうか、北大衛生工学科の技師長の方からヨーロッパ水道視察をした際の話をついた。フランスの浄水場で、職員に「タップウォーター（水道水）は飲みますか？」質問したところ、「失礼なことを聞くな」と叱られたそうだ。ニュアンスとしては、「この無礼者！」に近かったようだ。

ヨーロッパではボトル水を飲んでいる、という誤解が広まってしまったが、ミネラルウォーターは日常の飲用ではなく、健康飲料として飲んでいると聞いている。飲用はボトル水という誤解が広まってしまった。

私の数少ない経験でも、普通のレストランでは、テーブルに水道水を入れたボトルが無料で置いてあり、ミネラルウォーターを注文すると有料だった。

日本における 1980 年代（昭和 55 年以降）は次々と水道水質問題が起きた時代で、江戸川や淀川を水源とする大規模事業体で水道水の異臭味が問題となり、1981 年 9 月には琵琶湖で植物性プランクトンが異常発生し、琵琶湖・淀川流域の水道に異臭味が発生し社会問題化した。その前年、1980 年には日水協浄水処理特別委員会が、トリハロメタンに関する対策について発表している。水道水の安全を確保する砦は塩素滅菌（後塩）であり、水道事業体は「塩素の臭いは安全の印です」と住民に言っていたものが、何と説明した良いのか、言葉を失った。

いまだに日本の水道を自画自賛する決まり文句は、「世界でも数少ない蛇口から水を飲める…」であり、極端には、「世界でも稀にみる…」と言う。この場合の「世界」とは、アジアの開発途上国だけを指しているのではないか。そのアジアでハイレベルな水道を運営しているタイ・バンコクの MWA（首都圏水道公社）では、はるか以前から「水道を飲める区域の拡大」に取り組んでおり、毎年、蛇口から飲める区域を拡大し、それを住民に知らせて

いた。つまり、給水区域をバルブで切って、ブロック化できる技術をかなり前から有していた、ということである。それには、日本の J I C A 専門家の大きな貢献があったことを、改めて紹介しておく。専門家の中には、最高栄誉である「白象賞」をタイ国王から授与された人もいた。

2008 年、ウィーンで開催された国際会議に出席した時、宿泊したホテルはハイクラスと言えるものではなく、部屋の蛇口は粗末なものだった。しかし、1 階のレストランは小ざれいで、食事を出すカウンター越しに見える厨房は清潔だった。滞在中、ボトルがカラになると階下に降りて行って厨房の蛇口から水をボトルに入れていた。ある時、従業員が、「なぜ、わざわざ水を入れに来るんだ？」と尋ねるので、「飲用のためだ」と答えると、「お前の部屋の中にある蛇口と全く同じものだ」という。ウィーンの水道の一番上等な系統は、郊外の岩山からの湧水をそのまま導水して給水している系統で、ホテルの水がその系統かどうか確認できなかったが、冷たくおいしい水だった。要は、粗末な蛇口と清潔そうな厨房の蛇口との比較という「見てくれ」で判断していた訳だ。

そしてウィーンの水道は、その「見てくれ」に十分配慮していた。旧市街地を囲むリング（環状道路）の中心にあるシュテファン寺院がある広場はウィーン観光の代表と言えるものだが、広場にはしゃれた飲料水供給施設があり、大勢の観光客が利用していた。ウィーンの水道が二元給水をしているとは聞いていないから、トイレの手洗い用の蛇口から給水される水と全く変わらない水が供給されているのだろうが、人は飲用給水施設を使う。国際会議の会場にも、飲用の給水施設があった。

シンガポールのチャンギ空港にも、飲み水専用の設備があり、写真の通り背丈が低い子供まで用意している。かつて上下水道関係者の注目を集めた下水処理水の「NEWater」を飲用にしようという話はほぼ消えており、2018 年シンガポール I WW（水週間）の前頃から、シンガポール公共事業省は、プレゼンテーションなどで、「NEWater は IT 先端技術に必要な水に非常に適している」と語っている。

そもそも、蛇口から飲用に適した水を供給する必要があるのか、飲用はボトル水にして水道は雑用水にしてはどうか、という意見も根強くある。「途上国では本当に水道の水を飲みたがっているのか」という質問や、ついで（？）に「あなたは海外で水道水を飲むのか」という質問を受けたりする。中国はもはや途上国ではないが、政府は、「直飲水道」を掲げており、多くの都市で「直飲水道」に取り組んでいる。上海の南市浄水場ではオゾン＋活性炭による高度浄水施設が稼働していたが、浄水場から高度浄水のみを引いて、富裕層のマンションでは二元給水している事例があった。そのマンションに暮らしているという女性ガイドは、「水道料金は普通の水道と飲用水道と 2 つ払っている」と語っていた。それを上海全域に拡大するとは思えず、水道施設も「中国的混とん」を強く印象付けられた。

上海万博会場での、「直飲水設備」に群がる人々の姿(写真)が、「水道水を飲みたいのか？」という問いへの答えである。

もう1つ、水道は飲用と雑用の「白黒的二元活用」ではない。調理、食器洗い、手洗い、顔洗い、更に、入浴は雑用か？完全雑用はトイレのフラッシュ水以外に何がある？意外と雑用は少なく、飲用に適する良質な水を、飲用と共に使っているのが実態であろう。